

## カシノナガキクイムシによるウバメガシの穿孔被害と被害軽減対策の開発

大谷栄徳<sup>1</sup>・山下由美子<sup>1</sup>・栗生剛<sup>2</sup>・衣浦晴生<sup>3</sup>・長谷川絵里<sup>3</sup><sup>1</sup>和歌山県林業試験場 649-2103 和歌山県西牟婁郡上富田町生馬 1504-1<sup>2</sup>和歌山県農林水産部 640-8585 和歌山県和歌山市小松原通 1-1<sup>3</sup>国立研究開発法人森林総合研究所関西支所 612-0855 京都府京都市伏見区桃山町永井久太郎 68**Mass attack of *Platypus quercivorus* to *Quercus phylliraeoides* and development of the damage mitigation methods**Eitoku Otani<sup>1</sup>, Yumiko Yamashita<sup>1</sup>, Tsuyoshi Kuriu<sup>2</sup>, Haruo Kinuura<sup>3</sup>, Eri Hasegawa<sup>3</sup><sup>1</sup>Wakayama Forestry Experiment Station, 1504-1 Ikuma, Kamitonda, Wakayama 649-2103<sup>2</sup>Wakayama Prefecture Agriculture, Forestry and Fisheries Department, 1-1 Komatsubara, Wakayama 640-8585<sup>3</sup>Forest Health Group, Kansai Research Center, Forestry and Forest Products Research Institute, 68

Nagaikyutaro, Momoyama, Fushimi, Kyoto 612-0855

## 摘 要

本県のカシノナガキクイムシ（以下カシナガ）は、太平洋型個体群であることが明らかになっているが、ウバメガシにおけるカシナガ成虫の発生時期などの研究事例は少ない。そこで本研究は、ウバメガシにおけるカシナガの発生状況、穿孔被害を受けたウバメガシの処理方法がカシナガ発生に及ぼす影響を明らかにするため行った。ウバメガシの径別の発生は、穿入生存木のうち、大径木(平均胸高直径 20.0cm)と小径木(平均胸高直径 11.0cm)では、成虫発生期間に違いは見られず、また、穿入孔あたりの平均発生頭数についても、ほとんど違いが見られなかった。穿入生存木の処理別の成虫発生頭数を見ると、カシナガの繁殖成功率(成虫発生孔数/調査孔数×100)は、生立木区・切株区が高く、伐倒木区は低かった。また、調査孔当たりの成虫発生頭数は、切株区>生立木区>伐倒木区の順に多かった。ウバメガシ林におけるカシナガ被害対策は、穿入生存木の径級に関わらず駆除対象とすること、穿入生存木を伐倒する際は、地際で伐採し、切株を低くすることが被害軽減につながるということがわかった。特に、ウバメガシの穿入生存木を4月までに伐倒するだけで、カシナガの発生を抑制できることを明らかにした。穿入生存木を伐倒し、現場に残置するという極めて簡易な手法であり、かなりの労力軽減・低コスト化を図れるとともに、取り入れやすい駆除方法となる。